

16. 地球環境学堂

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 44)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 45)

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 高い質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

産官学連携による京都超 SDGs コンソーシアムを立ち上げ、国際共同研究や地域づくりの各種プロジェクトを多く実施している。また、国内だけではなく、東南アジアの若手研究者に研究資金の補助を行うなど、次世代研究者の養成に努めている。

〔優れた点〕

- 学際的研究の促進策として、令和元年度にシーズファンドによる研究支援を実施し、ベトナム・ラオスの若手研究者の計 11 名に対して、総額 25,850 USD の補助を実施した。

〔特色ある点〕

- 若手研究者の育成策として、若手教員等に対する研究助成を実施しており、平成 30 年度には計 7 名（総額 1,999,750 円）の助成を行った。
- 京都市・京都大学・企業等による京都超 SDGs コンソーシアムを令和元年度に立ち上げ、京都市や京都大学等をフィールドに、幅広い視点から、持続可能な地域・コミュニティ作りに向けた研究を進めている。令和元年 6 月 27 日には、キックオフとして京都大学《超》SDGs シンポジウムを開催し、800 名の参加を得た。
- マヒドン大学（タイ）の教員 1 名およびボゴール農業大学（インドネシア）の教員 2 名をクロスポイントメント教員として、平成 28 年より採用した。
- 平成 27～平成 30 年度に毎年、アジア地域の地球環境学の教育・研究連携に関する国際シンポジウムを主催し、各年に 16 か国、152 名（京都開催）14 か国 185 名（タイ・バンコクおよびサラヤ開催）、15 か国 286 名（ベトナム・ハノイ開催）、および 9 か国 195 名（インドネシア・ボゴール）の参加者を得た。令和元年度は 11 月に京都で開催準備中である。平成 29～令和元年度は京都大学シンポジウムとして実施した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、3件、2件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。